



*more***Trees**®

01. 目次／メッセージ

02. more trees のビジョン

03. 数字で見る2025年

04. 活動地域

05. 多様性のある森づくり

2025年のトピックス1：天然更新の補助

2025年のトピックス2：苗木づくり

2025年のトピックス3：地域間の技術交流

2025年のトピックス4：地域住民とともに

森づくりパートナーインタビュー01

合同会社MANABIYA 代表社員 國岡 将平さん

企業の森

12. 特集 育苗キット「JUBAKO」

森づくりパートナーインタビュー02

樹木医 佐々木 理史さん

16. 木材利用

国産材アイテム・ノベルティ

木質空間のプロデュース・監修

21. 森林由来カーボン・オフセット

23. 講演／イベント

講演・セミナー

イベント・ワークショップ

ツアー

森づくりパートナーインタビュー03

東京ステーションホテル 副総支配人兼マーケティング部長

八木 千登世さん

27. 協賛者様一覧

31. 法人概要

種から、未来へ

2025年も皆様の温かいご支援のおかげで、more trees の活動を続けることができました。心より感謝申し上げます。設立から18年、私たちは一貫して「都市と森をつなぐ」ことを大切にしてきました。そのつながりがより深く、より豊かな形で育まれていることを実感する一年でした。

近年特に大切にしているのが、地域の自然条件や歴史・文化に根ざした森づくりです。活動地はいまや国内外26か所にのぼり、それぞれの土地が持つ固有の気候風土を森づくりの礎としています。なかでも2025年に力を入れたのが「地域性苗木」の生産です。その土地に自生する樹木の種を採り、育て、同じ土地に植え戻す。一見地味ながらも、地域の生態系を守り、次世代につなぐためにもっとも大切な営みのひとつです。住田町では地域の団体・住民とともに苗木を育てる取り組みがさらに進み、栲原町では地元の林業ベンチャーが育てた苗木が初出荷を迎えました。美幌町では小学生たちが山から種を採り、育て、山に還しました。こうした地域での育苗の輪は都市にも広がり、「JUBAKO」という取り組みを通じて企業のオフィスでも苗木を育てる動きが生まれています。苗木の一本一本に、人の思いと土地の物語が宿っています。

木を植え、育て、活かし、また植える。この循環を担うのは、いつも地域に生きる人々の手と時間です。世界各地で山林火災や異常気象による森林被害が増え続けるなか、森林保全の重要性はいっそう高まっています。企業や自治体、個人の皆様とともに、これからも地域に寄り添いながら、一步一步、森づくりを続けてまいります。引き続き、ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

more trees 事務局長 水谷伸吉

森と人がずっとともに生きられる社会を目指して

一般社団法人more trees（モア・トゥリーズ）は、音楽家 坂本龍一によって2007年に創立され、建築家 隈研吾が代表を務める森林保全団体です。

地域の実情や風土に合わせて木を植え、育て、適切に伐り、活用することを基本とした森の保全活動を通じて

「森と人がずっとともに生きる社会」を目指しています。

活動をすすめる上で大切にしているのは「都市と森をつなぐ」こと。

森の恵みを都市へ届け、都市からは森の恵みの価値を受け止めた人々の想いや経済的な対価を森に返すことで、森と都市のあいだの循環を生みだし、あらたな関係性を紡いでいくことが私たちの考える森づくりです。



数字で見る2025年 | Highlights in 2025

2025年も森林保全活動をはじめ、セミナーやイベント、カーボン・オフセットなど都市と森をつなぐさまざまな活動を実施しました。

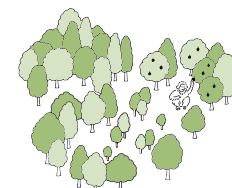
植林した本数

51,960 本



植林した面積

27.86 ha



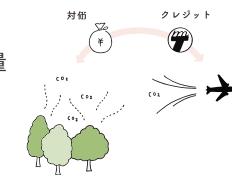
植林した樹種の数

88 種



森林クレジット
によってカーボン・
オフセットが実現した量

2,351 t



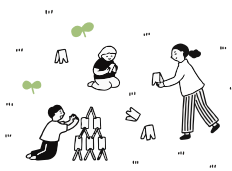
植樹イベントの参加人数

517 人



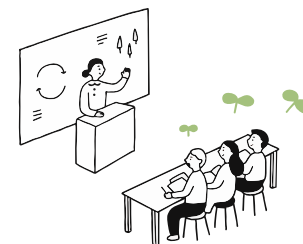
木育ワークショップを体験した人数

672 人



講演やシンポジウムに登壇した回数

29 回



講演の延べ聴衆

2,521 人

活動地域 | Where we work

2025年はあらたに岡山県西粟倉村、宮崎県都城市と協定を結び、more trees の活動地域は国内24か所、海外2か所となりました。地域の行政機関、森林組合、林業家、職人、住民等と協働で森づくりに取り組んでいます。また、地域単独では解決できない課題やその地域特有の資源に対して、都市側の企業をつなぎ、クリエイターやアーティストをつなぎ、専門家や教育機関をつなぎ、販売店をつなぎ、生活者をつないでいくことも私たちにとって大切な活動です。森と都市、それぞれの場の橋渡しをしながら「森づくりのパートナー」のみなさまと活動をご一緒しています。



岡山県西粟倉村



宮崎県都城市



多様性のある森づくり

Diverse Forest Project

森での植林や育林を、more trees は「多様性のある森づくり」と呼んでいます。私たちの考える多様性には、2つの軸があります。

ひとつは、森を構成する樹種やそこに棲む動物たちなど生物多様性に配慮した森づくりであること。

もうひとつは、森づくりへのアプローチの多様性です。一口に森づくりといっても、どこでも使える万能の方法はありません。森ごとに自然条件や気候風土、取り巻く社会状況や課題が異なります。さまざまな方法があるなかで、地域の人々がもつ林業の技術や知識を最大限に活かしながら、専門家や有識者の方々のアドバイスも取り入れ、その土地にあった森づくりを行っています。

そして、土地に暮らす人々の生活が経済的にも適切に維持されるよう、方法を一緒に考え、実践のサポートをしています。

1 天然更新の補助

森づくりのあらたな取り組みとして「天然更新の補助作業」を試験的に導入しました。天然更新とは、周囲から飛んできた種の芽生えや、伐採前から育っていた稚樹を活かして森林の再生を図る方法です。植林を必要としないため、成功すれば造林コストを大幅に抑えられる可能性がある一方で、シカなどによる食害やササによる被圧、種の供給不足など不確定要素も多く、これまで各地で失敗事例も報告されてきました。そのリスクを丁寧に下げながら自然の力を引き出すために、2つの地域で補助作業を実施しました。

岩手県住田町の植林地では、これまで保護ネットで囲ったパッチ内に1パッチあたり90本の植栽を続けてきました。今年は11のパッチのうち3つを試験区に設定。植栽本数を30本に減らすかわりに、機械で地表を攪乱し、ルートカッターを使ってネット周囲のササの地下茎を切断する作業を行いました。ササの成長を抑えることで、風に乗って飛んできた種が根を発芽しやすい土壌環境を整えるのが狙いです。来年以降、試験区とそれ以外のパッチでどのような違いが生まれるか、注意深くモニタリングを続けていきます。(写真1)

富山県南砺市では、対象エリア1.74haのうち、すでに天然更新の兆しが見られる0.51haについては今年の植林を見送りました。代わりに地拵えと「稚樹刈り出し」（自然に芽吹いた苗木を残しながら、周囲の草を丁寧に刈り払う作業）を実施。人が苗木を植えるのではなく、すでにそこにある命を守り育てる、そんな森づくりの一步です。今後は定期的に状況を確認しながら、天然更新が思わしくない場合は追加の植栽で補う予定です。自然の応答を待ちながら、森と対話するように進めていきます。(写真2)



2025年のトピックス

2 苗木づくり



岩手県住田町と一般社団法人邑サポートが協働で始めた苗木づくりの取り組み「なえうえる」が3年目に入りました。春の植林では18本、秋には40本の苗木を出荷。毎年恒例の春の鉢上げや秋の種採りに加え、今年は夏に結実する常緑広葉樹・タブノキの種採りにも挑戦しました。タブノキは東北にまで分布する数少ない常緑高木。2月に発生した大船渡市の山林火災で被害を受けた森林の再生に役立てるため、新たに生産を開始しました。今年は時期が合わず思うように種が採れませんでした。来年以降の生産拡大に向けて取り組みを続けていきます。



富山県南砺市では障害者支援を行う株式会社ミチルワグループの企業向け障がい者雇用支援サービス「Green Link Lab. (グリーンリンクラボ)」が5月に開設されました。南砺市の植林事業に使う地域性苗木の生産がスタートし、2024年に採取した種からはすでに1,200本程度を育成中です。今秋にはさらに大量の種を新たに採取し、来年の植林に向けて着々と準備が進んでいます。またGreen Link Lab.では、オフィスや店舗で苗木づくりに取り組むキット「JUBAKO」のアッセンブリも担っていただいています。シモジマ、マニユライフ生命保険、ホットスタッフ・プロモーションの3社に計4キットを納品し、企業と森をつなぐ新たな取り組みが広がっています。

2025年のトピックス

3 地域間の技術交流



総面積の97%を森林が占める奈良県野迫川村。more treesとの協働による植林候補地は急傾斜地で、森を維持しながら管理負担を軽減する方法が課題でした。



そこで野迫川村が注目したのが「自然配植技術」です。自然配植とは、周辺の植生を手がかりにその土地に合った多様な樹種を選定・配置する手法で、スギ・ヒノキ中心の一斉造林とは異なり、自然林に近い森を設計することで土壌の安定や生物多様性の回復が期待できます。

この技術を2007年から現場で磨き、地域性苗木約130種の生産体制も整えてきた三重県大台町・宮川森林組合から、森正裕さんらが講師として来村。同時期に急傾斜地での植林を検討していた奈良県天川村の天川村森林組合にも声がかかり、3地域合同の研修が実現しました。



初日の植生調査では、現地にヤマハンノキが群生し、シデ類が混じることを確認。2日目は宮川森林組合の指導で植栽設計を行い、土砂流出の抑制を主眼に、数年前に村が植えたコナラの生育状況もふまえた配植方針を策定しました。地域を越えた知見の共有が、more treesの森づくりを支えています。





2025年のトピックス

4 地域住民とともに

岡山県西粟倉村では、「百年の森林構想」を掲げる株式会社百森と連携協定を締結。スギ・ヒノキの伐採跡地にコナラやクヌギ、ブナ、ウリハダカエデなど14種630本の広葉樹を植樹しました。村民・行政・ローカルベンチャーが一体となり、経済林と多様性のある森の両立を目指しています。

宮崎県都城市では、隈研吾代表の初の協定締結式を経て、地域の方々とともにブナ科の常緑広葉樹イチイガシのドングリ拾いを実施。集めた1000個以上の種から苗木を育て、市有林への植林につなげる市民参加型の森づくりが始まりました。

北海道美幌町では、地元の旭小学校と連携した森林環境教育が4年目を迎えました。1年生が種を採り、2年生が苗木を世話し、3年生がカシワやミズナラ、エゾヤマザクラなどを山に植える学年別プログラムを通じて、子どもたちが森とのつながりを体感しています。



森づくりパートナーの声

01

合同会社MANABIYA
代表社員
國岡 将平さん

—普段のお仕事について教えてください。

鳥取県智頭町の町有林約57ヘクタールの管理を任せていただいています。木材生産や企業の森づくりに加え、研修事業も大きな柱。智頭町でも林業従事者がかなり減っているのが若手林業家の育成を行っています。宮崎県の椎葉村からインターンを4ヶ月間受け入れ、技術指導をして送り出す事業も始めました。さらに山主さんの世代交代が進んで所有者不明の山が増えており、相談所を開設して相続や管理のサポートをしています。先日の勉強会は60代以上が7割でしたが、20~30代の若い林業家も学びに来てくれました。

—昔から林業家を目指していたのですか。

まったく違う世界にいました。智頭町生まれですが、父の影響で将来経営者になりたいと思って大学で経営学を学びました。いずれ地元に戻るつもりで東京でITの仕事を3年間。智頭に帰ってまちづくり活動に関わったものの難しさを痛感しました。成功しているように見えてもメディアが取り上げているだけだったりして。地域のおじいさんやおばあさんの表情が豊かになっているかというところまでのインパクトはなくて、むしろ地域に一軒しかない靴屋さんが

潰れる方がインパクトがある。このキャップをどうにかするには地域の産業が元気になることが一番で、真っ先に浮かんだのが林業でした。町の93%が山なので。

—地元で林業を学び始めたのですか。

智頭町百人委員会という町づくりの団体があるんですが、そこの林業部会の部長が智頭町芦津財産区の綾木章太郎さんでした。芦津財産区は60代ばかりで山の施業をしていたので「若い子が来てくれるのは嬉しい」「1日でも半日でもいい」と章太郎さんが言ってくれて。それが山のスタートでした。

—初日はどんな作業をされたんですか。

木はこうやって伐るんだと教えられ、30分後ぐらいには60年生くらいの木を伐っていましたね(笑)

—はじめて伐ったときの感触は？

思う方向に倒れてほっとしました。それから現場で作業を繰り返すうちに徐々に慣れていきました。同時に、もっとちゃんと学ばないといけないと思うようにもなりました。自分自身、山で怪我をしたこともあって学びは大事だと。そこで地域の若い林

業家とチームを組んで2015年に林業を学ぶ団体を立ち上げました。それが合同会社MANABIYAの前身です。

—当初は何人くらいだったのですか。

いま会員は50人近くいますが、最初は3人ぐらいでした。そこからいろいろな人と山を通じて出会い、美味しいお酒を飲んでるうちに、少しずつ視野と事業が広がったという感じがしています。

—その後、more treesとの協働がはじまり、なにか変化を感じたことはありますか。

管理を任されている57ヘクタールのうち27ヘクタールが人工林なんですけど、山が急峻で林道をつくるのが難しい場合も多々あります。そういう土地は、木材を生産・販売することを目的として育てる経済林として管理するのは難しくなります。それなら経済林ではなく環境にいい森づくりがしたいと思っても、行政からの補助金は基本的には経済林が対象なので資金が足りず、政策の枠内での林業しかできないという側面があります。でもmore treesさんの企業の森づくりのプログラムを通じて、同じ方向を向いてくださる企業さんがいれば、資金提供を受けながら思い描く森づくりを進められるようになりました。智頭町では今キールズさんとキャロウェイさんが森づくりをしています。



—「企業の森」プログラムでは企業の社員を地域へお連れするツアーを行っていて、國岡さんには山での植樹体験や地域の方々との交流などをコーディネートしていただいています。都市から人を招く際に心がけていることはありますか。

ここでしか感じられない静けさや時間の流れ、水の音などをできるだけゆっくり味わってもらいたい、というのはありますね。それから智頭町が「もうひとつの居場所」になってくれたらいいなとも思います。

—2025年のハイライトを教えてください。

地域で種を採って苗木を育てる「地域性苗木づくり」のプロジェクトを2025年末にスタートしました。智頭農林高校に苗畑を設けて、秋冬に拾った種を育てはじめています。さらに鳥取大学や附属小・中学校と連携してこうという動きもあります。



—今後どんなことにチャレンジしたいですか。

智頭町は鳥取県の東部を流れる千代川という一級河川の源流の町なんですけど、森づくりをしていく上で「流域」でつながっていくことが重要だと感じます。智頭町に限らず、千代川流域での森づくりにもっとフォーカスしながら、子どもや学生や障害を抱えている方など、巻き込みを大きくしていきたい。現在MANABIYAには20代や30代しかいないので、正直、自分たちが50代、60代になったときに山に入り続けられるのかという不安もあります。だからこそ、年を取っても障害があっても関わられる仕事を今から作っておくことが大事。苗木づくりはまさにそういう仕事になり得るユニバーサルな取り組みだと思っています。

—流域感覚は、特に都市の人々にはまだまだ馴染みがないかもしれません。

ある地域に人が住めるのは、その地域に水があるからですね。水がなければ人は住めない。誰もが水を必要としているのに、誰も水を作り出すことはできません。水をつくることに一番近い仕事は林業だと思います。どういう木を育てどういう森づくりをするかが、どういう水を作るかに一番大きく影響している。いい山があるということは、自分たちが使う水の安心にもつながるはずなので、いい水を循環させるためにいい山をつくり続けたいです。そしてこれからもみなさんと美味しいお酒が飲めれば嬉しいですね。

企業の森づくり | Corporate Forest Program

「企業の森」は、多様性のある森づくりへの法人参加型プログラムです。地域を指定して継続的にご協賛いただくスタイルで森づくりにご参画いただいています。実際に現地に足を運び、森に入り、地域の方々との交流を通じて関係を育みながら、地域活性に貢献できることも醍醐味のひとつ。自然豊かな現地でのツアーや植樹体験などのイベント開催、ワーケーションやオフサイトミーティング先としての利用、学生インターンなど採用活動との接続、地域産材をいかしたノベルティや店舗什器の製作など、企業の森の活用事例も年々広がりを見せています。

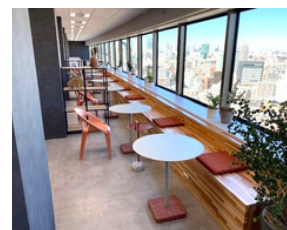
企業の森の活用事例



看板設置 (シチズン時計)



社員の植林体験 (TRACE)



オフィスでの地域産材の活用 (デッカーズジャパン)



学生向けオープンカンパニー (青山商事)

特集

育苗キット「JUBAKO」

都市で育て、森に還す。

都会でも森づくりに関わりたい。
なかなか足を運べなくても
森とのつながりは感じたい。
そうした思いに応えるかたちで
more trees は2025年、
都市で苗木を育てるキット
「JUBAKO」をリリースしました。
オフィスや店舗で種を蒔き、
社員やお客様とともに
苗木の成長を見守る、
新しいかたちの森づくりです。
育った苗木は、
やがて山へと植えられます。

都会で芽吹く小さな苗木を、
「都市と森をつなぐ」入口に。

15 POTS

15個のポット苗を
育てることができます



H = 60cm

D = 44cm

W = 70cm

JUBAKO 3 STEPS



種を蒔く

苗木を育てる

山に還す

種へのこだわり

人為的な遺伝子の攪乱を防ぐため、採取した地域が分かる種子のみを使用します。育った苗木は同じ地域に植えます。

苗木づくりのサポート

苗木の育て方や管理方法のアドバイス、害虫・病気のトラブル対応など、導入後もサポートを行います。

無事に育ったら山へ

順調に育った苗木は植樹に向けて出荷します。通常、種蒔きから約2年ほどで山に植えることができます。

長く使える

苗木を山へ植えた後も、ポットを追加購入することで次の苗木を育てることができます。

JUBAKOの導入事例



JUBAKO導入第1号は大都会のビル7階から 株式会社シモジマ

JUBAKO導入第1号となったのは、包装資材の専門商社として森林保全に積極的に取り組むシモジマ様。三重県大台町で「シモジマの森」づくりを進め、このたび東京・浅草橋に新たにオープンしたショールームへJUBAKOを導入いただきました。「自分の手で種を植えられるなんて嬉しい」。蒔いたのは、大台町の宮川森林組合が拾い集めたクヌギ・コナラなど6種の種。ショールームを訪れるお客様が、森を感じるきっかけになっています。都会のビルに、森づくりのあらたな文化が芽吹きました。

梶原の苗木を、スタッフ自らオフィスへ 株式会社ホットスタッフ・プロモーション

高知県梶原町で「HOT STUFFの森」づくりがはじまって1年。植樹体験ツアーで現地を訪れたホットスタッフ・プロモーションの社員4名が、町内で地域性苗木を育てているKIRecub苗木園へ向かいました。地域で採取した種から育てられた苗木がずらりと並ぶなか、一人ひとりがコナラのポット苗を選び、東京へ。オフィスの外に設置したJUBAKOにポットを納め、梶原町から追加で届いたどんぐりも蒔いて、「HOT STUFFの森 in Tokyo」が幕を開けました。

全国41拠点のオフィスで苗木づくり マニユライフ生命保険株式会社

和歌山県田辺市で「Manulife Impact Forest」の森づくりに取り組むマニユライフ生命保険様が社内で苗木づくりに参加するメンバーを募集。すると全国41もの拠点から参加希望が集まりました。田辺市周辺で採取したウバメガシ・イロハモミジなど5樹種・約1,000個の種をオフィスへ運び、樹木医・佐々木さんの指導のもと種蒔きワークショップを開催。オフィスのエントランスとカフェに2基のJUBAKOを設置して社員もお客様も親しめる「森への入口」が生まれました。



樹木医

佐々木 理史さん

——樹木医とはどんなお仕事ですか。

全国に3,400人前後いるんですが、仕事の幅はとても広いです。一番多いのは街路樹や公園の管理をしている方々。桜を専門にしている方もいれば、個人の庭の木の相談に乗る方、子どもたちにわかりやすく伝えることに特化した樹木医もいます。みんなそれぞれのフィールドで頑張っています。

——樹木のどんなところを見ているのですか。

診断ではまず外観を見ます。根元に腐朽菌が生えていないか、葉の色や枝先の枯れに異常がないかなど。車で通り過ぎただけで葉の異常に気づいて引き返すようなものすごい方もいます(笑)。機械を入れて精密診断に進むことも。枯れた樹木の原因を調べるとか、伐採が決まった樹木に「伐らないでほしい」という声が上がったときに仲立ちするようなこともあります。種を採ったり接ぎ木をしたりして後継樹を育て、「この木を維持するのは難しいけれど子孫をみんなで守っていきましょう」と提案できるのは樹木医ならではの感覚だと思います。

——子どもの頃から樹木に興味か？

盛岡の牧場の中で育ちました。父親が国の試験牧場に勤めていて、広大な土地のなかに一軒

家の官舎が20ほどあって村のようになっていたんです。町からは遠くて友達とはあまり遊べませんでした。そもそも学年に一人くらいしか官舎に住んでいる子どももいなかった。だから猫一匹と僕で森の中をうろうろして、子どもの頃から山や川で遊ぶのが好きだったんです。ただ自然が身近すぎて仕事にしようとは思わなかったです。

——なにが転機になったのでしょうか。

木曾に祖父の家があるんですが、夏休みにサワガニや水晶を見つけて遊んでいた沢が、ある年に行ったらコンクリートの三面張りになっていました。すごくショックだったんですよ。大人になってそのことが引っかかっていて、水辺の緑化に興味を持ち、ピオトープフォーラムに飛び込んだのがこの世界に入ったきっかけです。その後、緑化・造園の会社に15年ほどいて苗木づくりに関わりました。そのうち樹木のこともっと学ばなければと思って樹木医の資格を取りました。

——more trees と関わるようになって変化を感じることはありますか。

都市と森のマッチングというのをすごく意識するようになりました。ふだん都市で働く

方たちと接する機会が増えて、こんなにも日常が山の世界と切り離されているんだと感じたんです。オフィスには虫もいないし窓を開けられない場所もある。ただ、そうなってしまっていることを否定するのではなくて、うまく折り合いをつけながら都市と森を架け橋するお手伝いができたらいいと思うようになりました。more trees のスタッフの方とお話してみると、こんな情熱を持ってあいだをつなぐ人たちがいるのかととても影響を受けました。

——境界を越えて今まで出会うことのなかった人や業界や土地のあいだをつないでいけるのが樹木医でもありますね。

似たようなカテゴリーに見えても緑化業界と山業界ですらそんなに行き来がありません。ましてやIT業界と山の人が結びつく機会はほとんどない。だからこそあいだを取り持って、お互いの良さを活かしながら新しいなにかが生まれたら面白いですよ。

——2025年のハイライトを挙げるとしたら？

岩手県内の希少植物を独自の技術で増殖・保護している現場に関われたことです。岩手RDBに載っているアツモリソウやミズトンボ種子を採取し発芽・継代を繰り返して、ときどき新しい培地に植え替えながら育てて最終的に野生復帰を目指す試みです。ランの発芽はとても難しく、ほとんど成功例がないような種もあるなか、結果を出している研究者と1年間仕事できたのは大きな財産です。ここで得た知見は、more trees の現場で希少な樹木を扱う際にも応用できるかもしれせん。

——東北の森の未来をどう見えていますか。

確実に起きていることとして、気候が変わっています。暑くなれば植生も変わるし、ブナのような寒冷地の木は生きづらくなる。森が変われば生き物も変わってきますよね。他方、森と人との関わりが薄れて手入れがされない山が増えています。70代、80代で山の仕事をしている方たちの山の知恵が途切れかけ、森を歩いたことがない子どもが岩手にもたくさんいます。この子たちが大人になる頃にはどうになってしまうのか、瀬戸際の危機感がありますね。

——人が手を引いたら自然に森が戻るでしょうか。

人がいなくなった土地で自然度が上がった例はあり

ます。ただ、外来種が入り込んで土地に自生していた樹木が育たないとか、ほかの植物を寄せ付けず荒地地のようにになってしまうリスクもあります。最近の大雨を見ても、土壌が流れてしまい放置して森が育っていくのは難しいんじゃないかと思いますね。遷移には安定した時間が必要ですが、それが与えられにくい時代になってきています。人が利用してきた山は、手間で人が手を加えていくことが必要だろうと思います。住田町でmore trees さんが取り組んでいるような森づくり——地元の広葉樹から種を採り、苗木を育てて植える——では、単一の人工林とも笹が群生する放置林とも違う森が生まれつつあります。苗木を育てて植えると活着も早いし森になるスピードも変わります。いまは小さな取り組みだと思われるかもしれませんが、地道な関わりがあるからこそ、森は育っていくのではないのでしょうか。

——最後に育苗への思いとmore trees に期待することがあれば教えてください。

育苗は単純に楽しいです。種を採って、春に芽が出てくるのすごく楽しい。僕の場合、他の仕事ではこの楽しさは感じられないんじゃないかな。more trees さんにはこれからも様々なマッチングを続けていただきたいと思いますし、僕もそのお手伝いをしていきたいです。ハチドリのように、やれることをやっていく。その積み重ねを大事にしたいですね。



木材利用

Wood Utilization

more treesでは国産材をはじめとする森の恵みの活用を推進し、デザイナーや地域の職人と協働でオリジナルプロダクトを企画・製造・販売しています。

さまざまなシーンで国産材利用をサポートします。
たとえばイベントやキャンペーン用ノベルティの企画、商品の開発、オフィス・店舗のインテリアや什器の製作、端材アップサイクルや素材調達、空間の内装デザインや木質化、木材利用に関わる大小イベントの監修など、ご要望に合わせて幅広く対応しています。



KODACHI

音楽と建築、異なる表現で自然と向き合ってきた

坂本龍一と隈研吾は今なおかたちをかえて対話を続け、
KODACHIという棚が生まれました。

「棚」という漢字の右側にある朋は「友、仲間」を意味します。

それが「木」と組み合わせること、

棚は崖に沿い木材で棚のように張り出して作った道、

「かけはし」を意味するものとなりました。

気候変動、森林破壊、生物多様性の喪失——かつてない速度で

自然のバランスが崩れ、地球の未来が不確かさを増すいま、

人と自然を、都市と森を、そして現在と未来をつなぐ

「かけはし」となりたい。

そんな祈りがKODACHIには込められています。



KODACHIが育む、森と人

1 | 1個ご購入につき苗木を1本植樹



KODACHIを1個ご購入につき、TREES FOR SAKAMOTOを通じて高知県梶原町の森に1本の苗木が植えられます。梶原町は、坂本龍一がmore treesを立ち上げた2007年当初から活動を共にしてきた、いわば原点の地。同時に、木材を活かす独創的な隈研吾建築が生まれるきっかけとなった梶原町は、隈の原点ともいえる場所です。坂本と隈、ふたりの森への祈りが重なる地に、KODACHIが苗木を届けます。KODACHIを迎えることが国産材利用を通じた林業や木材産業の活性化を後押しするとともに、植樹によって日本の森を育てることにつながります。

2 | 使い手の想像力を呼び覚ますデザイン



天地や前後を入れ替えても美しく成立するデザインは、どの面も正面となり得る柔軟さを持ち、不規則な柱がもたらす遊び心が使い手の想像力をかき立てます。

“木々の中に浮かんでいるような棚をデザインした。以前デザインしたTSUMIKIの断面を縦に伸ばして柱とし、それを棚板のエッジに沿ってランダムに配置することで、棚の上に置かれた「もの」が柱によって見えたり隠れたりする...そんな森の中で「かくれんぼう」をしているような、楽しい風景を生み出した」と考えた”
(デザイナー：隈研吾)

3 | 木を活かし、次世代の担い手を育む



KODACHIには北海道産のシナ合板を使用しています。シナノキは日本固有種で、北海道に多く自生する樹種です。無垢材+手仕事重視のTSUMIKIに対し、KODACHIは合板+機械加工を多く取り入れ、熟練技術に過度に依存せず若手や新たな人材が関わりやすいものづくりに挑戦しました。1936年創業の老舗「滝澤ベニヤ」（北海道・芦別市）の職人がノンホルマリン接着剤を用いて一枚ずつ目視で選別した美しい合板を、「WOW」（北海道・旭川市）が加工。CNC加工と手仕上げを組み合わせて仕上げました。合板の選択にはものづくりの担い手を育て、日本の豊かな木の文化を未来へ手渡したいという希いが込められています。



PRODUCT DATA

商品名	KODACHI
デザイン	隈研吾
素材	北海道産シナ合板
サイズ	W700 × D220 × H540mm / 組立式
重量	約5kg
耐荷重	450kg
炭素固定量	約9.2kg
価格	36,000円 + tax
付属物	TREES FOR SAKAMOTOのイメージ写真と隈研吾のサイン入り植樹証明が同梱されます

国産材アイテム ・ノベルティ

国産材を活用した製品やノベルティの企画・開発・製造のお手伝いをしています。
ロイヤルカスタマー向けギフト、イベント参加者向けノベルティ、
端材などのアップサイクル製品、エンドユーザー向けのノベルティやショッパーなど、
ご要望や企画に合わせてご提案します。



タンブラー

「三井住友カードの森」のある
5地域の木材をミックス
三井住友カード



シャープペンシル

大分県・熊本県産のスギ材
三井住友カード



お箸

「シチズンの森」づくりに取り
組む長野県根羽村産のスギ材
シチズン時計



トレイ

長野県産のヒノキ材
シチズン時計



時計スタンド

静岡県産のヒノキ材
シチズン時計



組立式グリーティング
カード

大分県・熊本県産のスギ材
ベスト販売



スマートフォンスタンド

大分県・熊本県産のスギ材
Efun Company Limited



つみき (カスタム)

宮崎県諸塚村産のFSC認証スギ材
Efun Company Limited



鳩時計 (カスタム)

北海道産のクルミ材
Efun Company Limited



クリスマスチャリティー
オーナメント

奈良県・岐阜県産のヒノキ材
東京ステーションホテル



ヒノキボール

奈良県吉野産のヒノキ材
スーパーホテル



万年カレンダー

静岡県産のスギ材
スーパーホテル



風呂桶・風呂椅子

奈良県産のヒノキ材
スーパーホテル



つみき (カスタム)

宮崎県諸塚村産のFSC認証スギ材
マニユライフ生命保険



ヒノキボール

奈良県吉野産のヒノキ材
pearl+



1

木質空間の プロデュース・監修

more trees は、木質空間のデザインから国産材を使用した内装や店舗什器の製作、素材の提供まで幅広くサポートします。木の温もりは、住居やオフィス、店舗、飲食店、ホテル、病院などの都市空間に癒しをもたらし、木材には調湿効果や断熱効果といった特性もあります。木は成長の過程で二酸化炭素を吸収するため、空間に木材を取り入れることは炭素の固定にもつながります。都市で木材を使う＝都市の森ともいえるでしょう。



2

1：リビオシティ船橋北習志野のコミュニティルームに、more trees 監修による「セレクト玩具・書籍」を納品。玩具は素材・意匠・ストーリーの3軸で厳選し、more trees の森をはじめとする国産材・フェアウッドを使用した伝承玩具・知育玩具を中心に、子どもから高齢者まで入居者の多世代が一緒に楽しめるラインナップを構成しました。

2：国産木材についての認知拡大や利用促進をめざす「WOOD CHANGE PROJECT」の一環で、ホテル客室の一部を木質化することになり、more trees が客室内の家具セレクト、インテリアコーディネート、空間監修を担当しました。国産材を活用した木の質感・香り・温もりを感じられる客室空間をプロデュースし、宿泊者が日常的に体験できる場として提案しています。

森林由来カーボン・オフセット

Carbon Offset

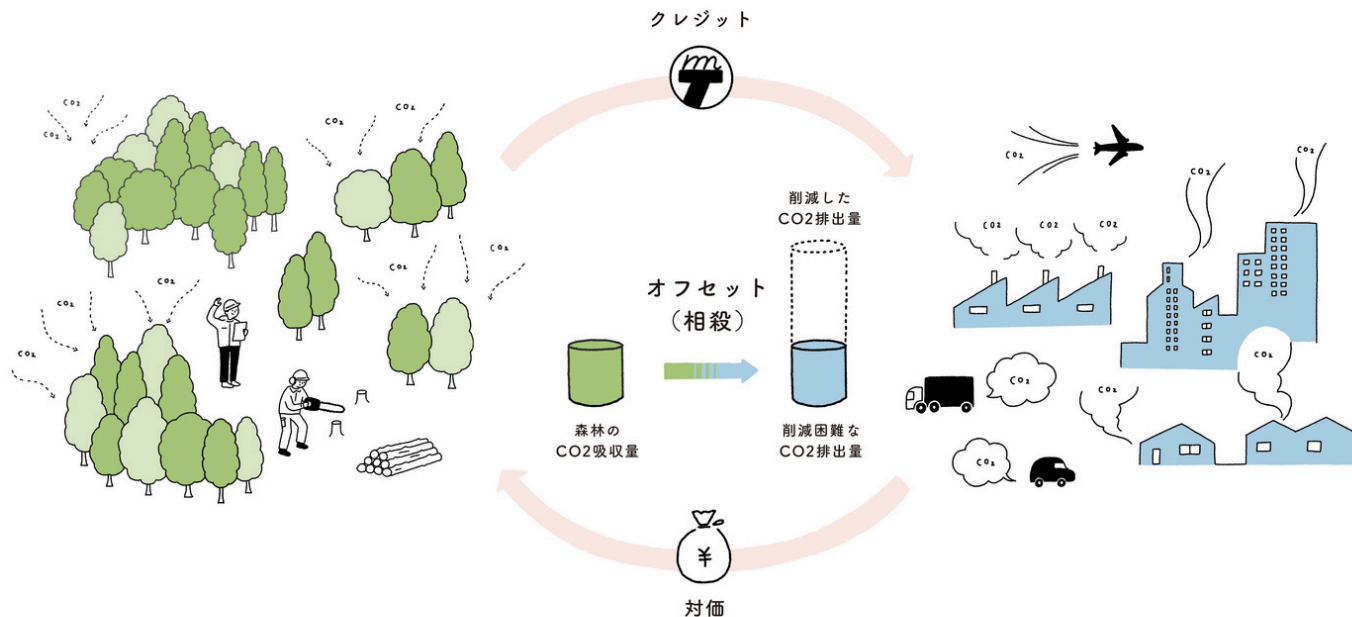
more trees は、「森林由来のクレジット」を活用したカーボン・オフセットサービスを提供しています。

森林由来のクレジットとは、森林をCO2吸収源と捉え、「植林や適切な森林整備によって増大したCO2吸収量」をクレジットとして価値化したものです。

日常生活や経済活動で排出されたCO2のうち、削減努力をしてもどうしても削減できないCO2排出量を森林のCO2吸収量でオフセット（相殺）することで脱炭素社会の構築に貢献いただけます。

森林由来クレジットの対価は

各地域での森林保全活動に還元されるため、土砂災害防止、水源涵養、生物多様性保全などの「森林の多面的機能の回復」や森林を有する「地域経済の活性化」にもつながるという側面があります。気候変動対策にとどまらない持続的な森づくりや地域貢献に意義を感じ、森林由来クレジットをお選びいただくケースが増えています。



北海道下川町
×
JIMOS



マキアレイベルの
販売数に応じた
オフセット

熊本県小国町
三重県大台町
宮崎県諸塚村
×
コーユーレンティア



主要トラックの
配送に伴う
CO2排出量を
オフセット

奈良県天川村
ほか4地域
×
JR東日本びゅう
ツーリズム&セールス



団体旅行に伴う
CO2排出量の一部を
オフセット

北海道下川町
×
ミツハシ



対象商品の
販売数×100gの
CO2をオフセット

奈良県天川村
×
ペーパー



ZEROCO2ペーパー
販売に伴う
CO2排出量を
オフセット

宮崎県諸塚村
×
ギア



端末の修理1件に
つき1kgのCO2を
オフセット

講演・イベント

Seminar and Event

講演やイベント、ツアーなど「伝える」ための取り組みもmore treesの柱となる活動のひとつです。森について知り、学び、体験し、足を運ぶことで、人々が生き生きとしていく姿をたくさん目にしてきました。現代社会のなかで失われつつある森と人の接点を増やし関わりを育みながら、森も人も健やかになっていくことが私たちの願いです。

講演・セミナー

これまでの活動を通じて得た知見や事例を活かし、市民、企業、学生、行政、教育機関、林業関係者など森づくり未経験者から専門家までさまざまな方を対象に、多様な切り口で講演やセミナーを行っています。



パートナー会2025
東京都中央区



林野庁主催シンポジウム
「森林吸収系 J-クレジットの
炭素プレミアム価値とその活用」
東京都千代田区



「智頭ノ森ノ語り場」
鳥取県智頭町



中高生向け
SDGS／社会問題スタディツアー
東京都江東区



山口県主催
「森林J-クレジット活用セミナー」
山口県山口市

イベント・ワークショップ

木に触れ、森を身近に感じられる「体験の場」を企画・運営し、子どもから大人まで幅広い年代の方にご参加いただいています。企業や店舗、学校、地域の公園など場所や参加者に合わせてカスタマイズしたイベントやワークショップのプロデュースも可能です。



小学生とツリーイング
北海道美幌町



tsumiki遊び
東京都渋谷区



木を使ったワークショップ
宮崎県都城市



more talks!
東京都港区



鉢上げイベント
岩手県住田町

ツアー

活動地域とのネットワークを活かし、現地を訪れるツアーを実施しています。森での植樹、種採り、森林散策、林業現場の見学、地域の名所巡りや地域住民との交流など、現地だからこそその体験を通して森や地域とのつながりを深めていただけます。



高知県梶原町



三重県大台町



鳥取県智頭町



三重県大台町



栃木県鹿沼市



宮崎県諸塚村



高知県中土佐町



高知県梶原町



奈良県野迫川村



奈良県天川村



栃木県鹿沼市



三重県大台町



和歌山県田辺市



長野県木曾町



岩手県住田町

森づくりパートナーの声

03



東京ステーションホテル
副総支配人兼マーケティング部長
八木 千登世さん

—普段はどのようなお仕事をされていますか？

東京ステーションホテルのマーケティング部で、セールス・ウエディング部門と、広報・制作・デジタルのプロフェッショナルを抱えるマーケティングコミュニケーションというセクションの統括をしています。

—御社がmore treesに関心を寄せてくださったきっかけを教えてください。

開業100周年の記念になにか意義のあることをしたいと考えていたところ、more treesさんをご紹介いただき、クリスマスチャリティー木製オーナメントの販売・寄付が始まりました。2025年で11年目になります。

—お客様の反応はいかがですか。

毎年心待ちにしてくださるお客様が増えまして、当初よりオーナメントの制作数も増えました。今では、チャリティーがはじまって1週間から10日ほどでオーナメントがすべてはけてしまう状況です。

—オーナメントのデザインは御社のご担当者が手がけてくださっていますよね。なにか心がけていることはありますか？

できるだけ多くの方が手に取りたくなるデザインを目指しています。キャラクターに寄りすぎず、ホテルらしさやクリスマスらしさを感じられるようデザインモチーフを検討しています。



—この11年で変えたことはありますか？

チャリティーの発信の仕方を変えました。以前はチャリティーオーナメントありきで、オーナメントの可愛らしさや魅力を謳って販売し、収益をすべてmore treesに寄付しますという伝え方だったんです。ここ2〜3年は、森林保全の大切さを前面に打ち出して、ご寄付への返礼品としてオーナメントをお渡ししますという発信に変えてきました。それぐらい我々も森林保全の意義を強く感じています。

—11年も続けてくださっていることが本当にありがたいです。なにか継続の動機づけになっているのでしょうか？

ホテルのゲストの方々にも「自分も森づくりの活動に携わっている、参加している」と感じていただきたいという思いがあります。また、more treesさんは、森に木を植えるだけでなく伐った木材を使うことも大切にされていますよ

ね。木製オーナメントの制作によって循環の仕組みにも貢献できる。それも、私たちが11年続けている大きな理由です。

—2025年のハイライトを挙げるとしたら？

ホテルは2025年、開業110周年を迎えました。私たちはこのホテルを「リビングヘリテージ」——使い続ける文化財と呼んでいます。存在そのものがサステナブルである以上、私たちがホテル業界でも、さらに日本の観光業界でもサステナブルな在り方を牽引していかなければ、と思いを新たにしました。ホテルのミッションとして一番目にソーシャルレスポンスビリティを掲げ、東京を代表するホテルとして環境保護・地域貢献に取り組むと明言もしています。そのようなホテルがこの先100年、200年をどう歩むのかを考えたとき、森を育てていく営みがホテルの在り方と非常に親和性があるのではないかと感じ、2026年からは「企業の森」づくりに挑戦することを決めました。

—丸の内という、東京のど真ん中にあるホテルが森づくりに取り組むというのは、都市でなにかやりたいと思っている人々や企業にとって大きな勇気づけになりますね。

森づくりをしたいという気持ちになったのも、チャリティーオーナメントを11年続けてきたからこそなんです。その間にmore treesさんから、森のことをたくさん学ばせていただきました。たとえば日本は国土の約7割が森林であるにも関わらず、そのうちの4〜5割が人工林で放置されがちだとか、木材自給率は3〜4割ほどしかないなど切実なお話を初めて聞きました。一方、世間では森の深刻な状況はまだ知られておらず、生態系の保全の大切さともっと知らせるべきだと思ったんです。それならまずは我々スタッフが森づくりに通じて森のことをもっと理解しようと。そしてお客様にも伝えていくことで、もっと自分事にしたいですね。

—地域を指定して森づくりに取り組む「企業の森」プログラムで、御社は岩手県大船渡市での森づくりをご検討いただいていますね。なぜ

大船渡を選ばれたのですか？

311の津波、2025年の大規模山火事と大きな災害が続いた地域に直接関わることに意義を感じています。さらに東京駅と東北には実は深い縁がありまして。2011年の震災当時、東京駅の駅舎は再開業に向けた保存復原工事中でした。1914年（大正3年）の創業時に駅舎の屋根材（スレート）には宮城県でしか採れない石が使われていて、復原工事でも同じ石を使うことになりました。現地で用意をしていただき、あとは東京に発送するだけという段階で地震が起きて津波で流されてしまったんです。でもそこで諦めずに流されたものを集められるだけ集めて、汚れをとって、それがいま駅舎で使われています。ですから東北とこの東京ステーションホテルをつなぐ物語というのは、もう111年前から始まっていたんですね。私たちが大船渡での森づくりに取り組むことでさらに深まる東北とのご縁を、未来にもつなげていきたいと思えます。



—そんなご縁があったのですね。企業の森づくりをご一緒できることがますます楽しみになりました。他にこれから挑戦したいことはありますか？

ホテルのゲストのみならずにも森づくりに参加いただくにはどうしたらいいのかは常に考えています。「JUBAKO」で苗木を育てるのか、現地へ赴くことなのか、はたまた別のことなのか。more treesさんのお知恵を借りながらゲストが森づくりに興味を持ち、参加できるプログラムを模索していきたいです。

協賛者様一覧

 <p>GlobalGiving</p>		<p>Have a good Cashless.</p>  <p>三井住友カード</p>		<p>CITIZEN</p>	 <p>GeoTechnologies</p>	
	<p>あいおいニッセイ同和損保</p> 	<p>BIOTOP</p>		 <p>au じぶん銀行</p>	<p>ウエルシアユニオン</p>	<p>BOTANIST Foundation</p>
 <p>マニユライフ生命</p>	 <p>Creative Rental Company</p>		<p>あなたの未来を強くする</p> 	<p>TRACE</p>	<p>DEAN & DELUCA</p>	 <p>住友三井オートサービス</p>
 <p>株式会社エフエン</p>			 <p>SINCE 1851</p>	 <p>プレスの力で、未来にプラス。</p>		
			<p>MACCHIA LABEL マキアレイベル</p>	 <p>Natural Treatment & Henna-Color</p>	<p>一生涯のパートナー</p>  <p>Dai-ichi Life Group</p>	<p>COLOURS</p>
				 <p>伊藤忠リーテイルリンク株式会社</p>		
















































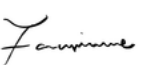







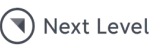




 傘はファッションだ。 UMBRELLAS ARE FASHION.	 UNITED ARROWS LTD.	 ライフスタイル提案商社 TOYOSHIMA	 kokode.jp KYUSHU SELECT SHOP	 KYGNUS	 Newport	 DAMDAM TOKYO	 ecovadis	<p>FASS実行委員会 株式会社プリプレス・センター 株式会社オリエントコーポレーション 株式会社ピープルフォーカス・コンサルティング 株式会社ネイチャーズウェイ 株式会社中島重久堂 COCONO Natural株式会社 PLCパートナーズ株式会社 utitocono KOYORI 株式会社オープンパワー 株式会社ミルク 株式会社高松金属 株式会社ビルド 株式会社たかくら新産業 株式会社スタンダード 一般社団法人日本WPA V.Iグループ株式会社 アサヒベット株式会社 サダシゲ特殊合板株式会社 ディオニー株式会社 一般社団法人未来とコラボ 株式会社BLUABLE 株式会社NTTスマイルエナジー 株式会社アーチ 株式会社アジョイア・ジャパン 株式会社あたぼう 株式会社キゴコロ 株式会社コロバスタイル 株式会社フランドル 株式会社マルヒ 株式会社岡村商事 彩り株式会社 日本食品製造合資会社 有本開発株式会社</p>
 dinos	 サツドラ SAPPORO DRUG STORE	 octopusenergy	 ecool	 HYUNDAI	 ROA Irv	 ペーパーロール	 TAISEI	
 UGG®	 Members	 URBAN RESEARCH DOORS	 SOLA TO	 innisfree	 ZURICH	 CWI	 SMBC SMBC信託銀行	
 SMFL SMFLレンタル	 GEAR	 KAZUMA inc	 STAR TECH STAGE ART & TECHNOLOGY	 NOHARA	 THE TOKYO STATION HOTEL	 cofl by 4C	 近畿日本 ツーリスト	
 SMFL	 GEAR	 commons	 ミツハシロイス	 WILLIFE.com	 Afternoon Tea LIVING	 ROWE	 YAHOO! JAPAN ネット証券	
 SUPERHOTEL	 InteriorOfficeOne 株式会社 インテリアオフィスワン	 SMFL SMFLみらいパートナーズ	 Speaks A company that is powered	 U1R Sora-Ha Origami	 HIROMATSU	 株式会社 BUODO EXPORT		
 Favanne	 iconicflower	 YAMAHA 株式会社ヤマハミュージックエンタテイメント・ホールディングス	 宇津木金属 UTSUKI METAL	 シブヤ本町けい 健康な暮らしを応援する。	 Narumi Trading Co., Ltd.			
 ウーマン スマイル カンパニー senshukai	 三機工業	 Next Level	 Asste	 株式会社 新星コーポレーション	 大昭和紙工業株式会社	 FünRunk co., Ltd.		





Photo by Neo Sora ©2020 KAB Inc.

人類は森とともにありました。
森が崩壊したところでは文明が減っていきました。

今、世界中で森林が崩壊しています。
これは人類文明全体の滅びへの警告と言えるのではないのでしょうか。

実は日本は森林の多い国です。
たくさんCO2を固着し、また水を保ち、多くの生命を養い、
はたまた海まで育ててくれる貴重な森を、
後々の世代まで残すために力を合わせましょう。

more trees!!

創立者 坂本龍一



都市と森をつなぐ

法人概要 Corporate Profile

一般社団法人more trees

107-0052 東京都港区赤坂4-7-7 H&K赤坂レジデンス201
03-5770-3969
info@more-trees.org
<https://www.more-trees.org>

事業内容

国内外での森林保全（植林、間伐、整備など）、国産材の普及、森林由来のカーボン・オフセットサービスの提供、森林に関するセミナー・イベント、森林を訪れるツアーの企画・開催、被災地支援活動、その他森林に関する事業全般

設立

2007年7月19日

役員等

創業者 坂本龍一
代表理事 隈研吾
理事 池田正昭 見城徹 石橋直樹
監事 山崎卓也

※本レポート内の文章・画像等の無断転載はご遠慮ください。

FSC マーク